

ヴェネツィアとその潟

～ヴェネツィア派の絵画とカナレットの描いた 18 世紀のサン・マルコ広場～



先月はサン・マルコ広場がアクア・アルタ（高潮）に見舞われて大変だったようですが、ヴェネツィア帰りの知人に聞いたら、ヴェネツィアの人たちはもう慣れっこで気にならないそうです。なんでも「モーゼ計画」という防潮計画が進んでいて、来年完成予定とのこと。早くできるといいですね。

『ヴェネツィアとその潟』は、文化遺産の登録基準（i）～（vi）のすべてを満たしている、数少ない世界遺産です。また、1964年にこの地で開催された「第2回歴史的記念建造物の建築家・技術者国際会議」で「ヴェネツィア憲章」が採択され、ヴェネツィアは世界遺産の歴史と関わりが深いことも忘れてはなりません。

水の都として名高いヴェネツィアは、美術の分野においても、傑出した都市です。サン・マルコ大聖堂にある総面積約 4,000 m²のモザイク画（装飾工芸）に代表されるビザンツの影響を思わせる作品や、ルネサンスとは一線を画する「ヴェネツィア派」の画家たちの作品が多いことは、ヴェネツィア美術の特筆すべき点です。ヴェネツィアを含むこの一帯がかつてビザンツ帝国の支配下にあり、18世紀まで都市国家としてフィレンツェとライバル関係にあったことも、その要因と云えるでしょう。ちなみに、イコンなどのモザイク美術の宝庫である世界遺産『ラヴェンナの初期キリスト教建造物群』は、ヴェネツィアの南方約 100 kmに位置していて、文化的な繋がりを感じさせてくれます。

「ヴェネツィア派」というと、日本人には馴染みが薄いかもしれませんが、16世紀頃からヴェネツィアで始まった新しい流派で、題材の制限が少なく、わりと自由な作風の絵が多いのも、特徴です。

代表的な画家は、ティツァーノ（1488年頃～1576年）やティントレット（1518年～1594年）、ヴェロネーゼ（1528年～1588年）などで、日本でも時々、彼らの作品が観られる企画展が開催されています。当時のフィレンツェの画家は、油絵を板に描くことがまだ多かったのに対して、ヴェネツィア派の画家たちはキャンバス（布地）に油絵で描くことが主流となっていました。



ティツァーノ『受胎告知』



ティントレット
『聖マルコの遺体の運搬』



ヴェロネーゼ『レヴィ家の饗宴』

自由な作風であるヴェネツィア派の集大成とも云えるのは、後の18世紀にカナレット（1697年～1768年）がヴェネツィアの景観を描いた作品だと思います。かなり緻密に描かれていて、とても完成度の高い絵です。小筆や定規などを使って細かく描いているようにも見えますが、意外と大胆な筆致で描いているところもあります。



カナレット『サン・マルコ広場』



カナレット
(ジョヴァンニ・アントーニオ・カナル)

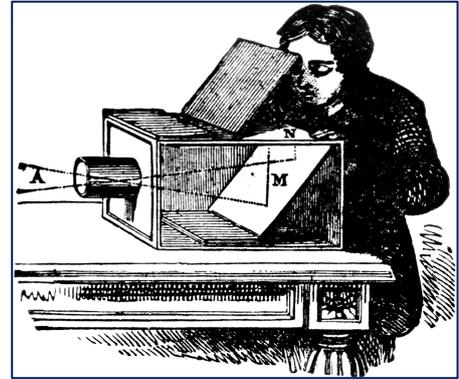
1730年頃に描かれた「サン・マルコ広場（ハーバード大学付設フォッグ美術館蔵、縦約80cm×横約120cm）」は、約300年前の姿が忠実に描かれていて、たいへん貴重です。なんと、現在とほぼ同じ景観です。違う箇所は、鐘樓のシックな感じの色合いでしょうか。実は、この鐘樓は一度倒壊していて、1912年に再建されました。それゆえ、この絵が重要なのです。倒壊前の鐘樓の姿がそのまま、当時のカラー写真のように把握できるのです。カナレットのように、ここまで精密にヴェネツィアを描いた画家は、他にいません。カナレットの作品の前に立つと、300年前のヴェネツィアを訪れているような気分になります。余談ですが、日本に西洋絵画がもたらされたのは、江戸時代末期です。もし、それ以前に伝わっていたら、江戸時代の京都や大坂の街並みが、カラー写真のように忠実に描かれていたかもしれません。江戸城はどのような感じだったのでしょうかね。

18世紀のヴェネツィアは、既にヨーロッパの中でも有数の観光地であったため、現在の絵葉書のように、お土産としての風景画が至る所で売られていました。写真のない時代ですから、観光客はその目に焼き付け、記憶に留めておくしかなかったでしょう。そういう状況の中で、カナレット作品は人気を博していました。その作品数は制作時間がかかる割には意外と多く、枚数も量産させて、十分な生計を立てられたほど。海外、特に英国人の富裕層からの注文もあり、ビジネス的にも成功を収めたのです。

カナレットがこの写実的な絵をどうやって描いたのか、と思われる方も多いでしょう。当時、「カメラ・オブスクーラ (camera obscura)」という箱型の投影機があり、投影されたものをなぞり書きしたり、それを拡大して大きなキャンバスに描いたりしていました。直線を描く場合は、点と点を細い糸状のもので繋いで、それを頼りに描いたりするなど、当時の画家は様々な工夫を凝らしていました。



カナレット『グランド・カナルの入口』



カメラ・オブスクーラのイメージ

サン・マルコ広場は、昔も今も変わらずに、ヴェネツィア観光の中心です。カナレットの絵からも分かるように、約300年前の風景とあまり変わっていないのが、嬉しいですね。パッケージツアーでは、サン・マルコ寺院とドゥカーレ宮殿に入館し、サン・マルコ広場周辺をガイドの案内で2時間ほど観光するのが、一般的です。サン・マルコ寺院はその荘厳なモザイク画に圧倒されますし、ドゥカーレ宮殿のティントレットの傑作『天国』は必見です（『すべてがわかる世界遺産大事典<下>巻』P. 80~81）。しかし、パッケージツアーではヴェネツィアは1泊が多いので、もったいない気がします。ヴェネツィアには、もっともっと観てほしい絵がたくさんあります。ヴェネツィア派作品を多く展示している「アカデミア美術館」や、ティツィアーノやティントレットの作品がお目見えするサン・マルコ広場対岸の「サンタ・マリア・デッラ・サルーテ聖堂」にも、ぜひ足を運んでほしいです。また、ピカソやカンディンスキーなどの現代アート作品を所蔵している「グッゲンハイム美術館（ペギー・グッゲンハイム・コレクション）」も近在しています。母体であるニューヨークの「グッゲンハイム美術館」が、今年2019年、『フランク・ロイド・ライトの20世紀の建築』の構成資産のひとつとして世界遺産に登録されたのは、記憶に新しいところです。ヴェネツィアはギャラリーやインスタレーションも多く、芸術都市としての歴史だけでなく、アートの輝きを、未来へと放ち続けているのかもしれないね。

沼田政弘